

群 教 セ	H01 - 01
	平 14.207 集

体を動かして遊ぶことを楽しむ幼児の育成

- 友達や教師とのかかわりの変化に視点を当てた
環境の構成の工夫 -

特別研修員 福田 奈々子 (館林市立北幼稚園)

《研究の概要》

本研究は、友達や教師とのかかわりの変化に視点を当てた環境の構成を工夫することを通して、体を動かして遊ぶことを楽しむ幼児が育成していただけることを明らかにしようとしたものである。具体的には、教育課程を踏まえたうえで、本学級の幼児の友達や教師とのかかわりの姿を時期として押さえ、その時期に応じて物的環境の構成や、人的環境の構成としての教師のかかわりを工夫していくことで幼児の変容を明らかにしたものである。
【キーワード：幼児教育、環境の構成、友達や教師とのかかわり、体を動かして遊ぶ】

主題設定の理由

幼児期は、体が著しく発育するとともに、運動機能が急速に発達する時期である。幼児はそのとき発達していく機能を使って自発的に活動し、その機能を使うことによって更に発達が促されていく。そのため、幼児が伸び伸びと体を動かして遊ぶ開放感や心地よさを体験したり、できる喜びを味わったり、たくさんの友達と思い切り体を動かして遊ぶ充実感を体験したりすることを通して、体を動かして遊ぶ楽しさを十分に味わうことが大切である。それが幼児の運動に親しむ心情・意欲・態度を育てることにつながると考える。

本学級は、2年もしくは3年保育、年長5歳児のクラスである。4月から5月の幼児の遊びへの取組や友達とのかかわりを見ると、室内で友達と一緒にブロックやゲームで遊んでいることの多い幼児、戸外の遊びは嫌だと言って、教師を誘い室内でままごと遊びをしようとする幼児などが見られた。また、自分ができないと思う遊びはしようしない幼児などの姿も見られた。これらの要因として、テレビゲームなどの影響で、友達と一緒にブロックやゲームをすることに興味が出てきたこと、戸外で体を動かして遊ぶ楽しさを味わう経験が少なかったこと、クラス替えにより幼児の心が不安定で、気の合う友達と安心して遊べる遊びを求めていること、友達と自分の違いを意識するようになり自分ができないと恥ずかしいと感じる気持ちが芽生えてきたことなどが考えられる。

また、幼児とともに遊んでいると、幼児の思いが少しずつ理解できていく部分と理解の深まらない部分がある。私は今までの保育を振り返り、幼児が友達や教師とどのように思いを伝え合いながら遊びに取り組んでいるのかをどれくらい理解して保育にあたってきたか反省させられた。幼児にとって、一緒に体を動かして遊べる友達や教師の存在は大きい。私は、友達や教師とのかかわりが幼児の心を安定させ、伸び伸びと体を動かしたり、自信を持ったり、たくさんの友達と一緒に思い切り体を動かして遊ぶ充実感を味わったりするなど、互いの経験や育ちを豊かにするものになってほしいと考える。そこで、友達や教師とのかかわりの変化に視点を当てた環境の構成の工夫をすることで、体を動かして遊ぶことを楽しむ幼児の育成について研究を進めていきたい。

研究のねらい

友達や教師とのかかわりの変化に視点を当てた環境の構成を工夫することにより、体を動かして遊ぶことを楽しむ幼児が育成できることを、実践を通して明らかにする。

研究の見通し

安定しようとしている時期では、一緒に遊ぶ楽しさを味わえる環境を工夫すれば、安心感や開放感を味わいながら幼児なりに遊ぶようになり、体を動かす心地よさを感じるようになるであろう。(見通し1)

経験を広げようとしている時期では、できる喜びを一緒に味わえる環境を工夫すれば、繰り返し取り組んだり、挑戦したりするようになり、体を動かして遊ぶ自信や意欲をもつようになるであろう。(見通し2)

遊びを楽しもうとしている時期では、力を出し合い自分たちで遊びを進める環境を工夫すれば、力を発揮し、力を合わせて体を動かすようになり、体を動かして遊びを進めていく充実感を味わうようになるであろう。(見通し3)

研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 体を動かして遊ぶことを楽しむ幼児について

「やってみたい」「面白そうだ」など、幼児は遊びのなかで様々な環境に心を動かされ、幼児なりの興味や動きで伸び伸びと全身を使ってそれにかかわろうとしていく。ここでは本学級の幼児の実態や教師の願いから、次のような姿を、体を動かして遊ぶことを楽しむ幼児ととらえた。

安心感や開放感を味わいながら、幼児なりに体を動かして遊んでいる。

友達や教師と一緒に遊ぶことを楽しんだり、汗をかいたりする心地よさを共有している。

好きな遊びを繰り返し楽しんだり、いろいろな遊びに目を向け、やってみようとしていたりしている。

できるようになりたいことなどに、幼児なりに挑戦したり、自信をもって遊んだりしている。

グループの友達やたくさんの友達と一緒に伸び伸びと遊ぶことを楽しんでいる。

グループの友達やたくさんの友達と力を合わせ、全身を使って思い切り遊んでいる。

(2) 友達や教師とのかかわりの変化に視点を当てた環境の構成について

幼児一人一人の発達の姿は様々であるが、クラスや学年の幼児の姿としてとらえたときに、成長の節目や発達の道筋を大きくとらえることができる。

幼児の友達や教師とのかかわりの変化に視点を当てて見ると、進級しクラス替えをした4月から5月ごろには以前同じクラスだった友達と一緒に遊ぼうとする姿が多く見られる。また、教師とのかかわりを見ると、一緒に遊ぶ中で見守られたり支えられたりすることで安心感をもって遊ぼうとする。このような時期には、友達や教師と安心して遊べる遊具や遊び、場所、雰囲気を作り、教師と一対一でかかわったり、安心感をもったりできるような言葉掛けや援助をする。

6月から7月ごろになるとクラスの雰囲気や友達、教師にも慣れ、少しずつ自分を出せるようになっていく。そして、新しい友達関係もでき、遊びに広がりが出てくるようになり、教師に遊びを見てもらいたがったり、できるようになったことを認めてもらいたがったりし、自信や意欲をもつようになる。このような時期には、気の合う友達や教師と一緒にやってみ

よと思えるような遊具や遊び、場所、雰囲気を作り、一緒に挑戦したり繰り返し取り組んだりし、自信や意欲がもてるような言葉掛けや援助をする。

9月から10月ごろになると、グループの友達やたくさんの友達と一緒に伸び伸びと体を動かしたり、力を合わせたりして遊ぶようになる。教師が遊びの仲間として加わり、幼児の思いや考えを引き出したり見守ったりするかわりをする中で、幼児が自分の力を発揮したり、友達と力を合わせ自分たちで遊びを楽しんだりするようになってくる。このような時期には、グループの友達やたくさんの友達と力を出し合い、自分たちで遊びを進めていくことができるような遊具や遊び、場所、雰囲気を作り、自分たちで遊びを進めていこうとする姿を見守ったり、幼児たちに任せたりする援助をする。

以上のように、幼児が友達や教師とのかかわりを変化させていくなかで、体を動かして遊ぶことを楽しめるよう、幼児の育ちに応じて遊具や遊び、場所、雰囲気、言葉掛け、援助などを工夫した物的・人的な環境の構成をしていくことを、友達や教師とのかかわりの変化に視点を当てた環境の構成ととらえた。

2 研究の方法

研究の見通しの基づき、以下の計画で保育実践を行い検証する。

(1) 実践計画

対 象	館林市立北幼稚園 2年・3年保育 5歳児26名(男児14名 女児12名)
期 間	平成14年4月から10月

(2) 検証計画

検証項目	検 証 の 観 点	検証方法
見通し1	新しい友達や教師とのかかわりながら、安定しようとしている時期に、新しい友達と一緒に同じ遊びを楽しめたり、幼児なりの遊び方ができたり、教師と一緒に遊ぶ楽しさが味わえたりできるような環境を工夫したことは、安心感や開放感を味わいながら幼児なりに伸び伸びと遊び、体を動かす心地よさを感じるようになることに有効だったか。	遊びに取り組む幼児の表情や言葉、幼児同士の会話などから変容をとらえる。
見通し2	気の合う友達や教師を誘い遊びの経験を広げようとしている時期に、友達や教師とやってみたいと思えたり、試したりし、できる喜びを味わえるような環境を工夫したことは、幼児同士誘い合ったり、友達や教師と繰り返し取り組んだり、挑戦したりして、いろいろな遊びを楽しむ気持ちや自信、次への意欲をもつようになることに有効だったか。	幼児の絵画や作品、保護者の言葉などから変容をとらえる。
見通し3	グループの友達やたくさんの友達と一緒に遊ぶことを楽しもうとしている時期に、グループやたくさんの友達と思いを伝え合ったり、力を出し合ったり、自分たちで遊びを進めたりできるような環境を工夫したことは、自分の力を発揮したり、たくさんの友達と力を合わせたりして思い切り体を動かし、友達と一緒に遊びを進めていく充実感を味わうようになることに有効だったか。	

研究の展開

3年保育の教育課程、第11期、第12期、第13期を踏まえたうえで、本学級の幼児の友達や教師とのかかわりの特徴的な姿をあげ、時期として押さえた。その時期に応じて、物的環境の構成や、人的環境の構成としての教師のかかわりを工夫していくことで、その有効性を明らかにしていく。(3年保育の教育課程、第11期、第12期、第13期については、資料編参照)

時期	新しい友達や教師と一緒に遊ぶことで、安定しようとしている時期	気の合う友達や教師を誘い、遊びの経験を広げようとしている時期	グループの友達やたくさんの友達と一緒に遊ぶことを楽しもうとしている時期
物的環境の構成	教師と一対一のかかわりができ、安心して新しい友達とも一緒に遊べるよう他の幼児に比較的左右されない園庭の隅に遊具や場を設定する。 幼児にとって親しみやすく、遊んだことのある遊具を用意する。 一人一人の遊び方に対応できる遊具を用意する。 上記のような条件を満たす遊び例(長縄跳び・フープ・ドンジャンケンなど)	気の合う友達や教師と一緒に遊びを楽しめるよう、幼児の人数や遊びの種類に応じて遊びの環境を広げていく。 幼児がやってみたいと思えるような、幼児にとって目新しい遊具や場の構成をする。 幼児が挑戦してみたくなるような遊具の選択をする。 上記のような条件を満たす遊び例(鉄棒・雲梯・色鬼・氷鬼など)	自分の力を発揮したり、グループの友達やたくさんの友達と一緒に力を合わせて遊んだりすることを楽しめるよう人数に応じた遊具の数を調整する。 思い切り体を動かして遊べるよう広い空間に遊具や場を構成する。 上記のような条件を満たす遊び例(リレーごっこ・表現遊び・開戦ドン・色鬼・氷鬼・巧技台・ドッチボールなど)
教師のかかわり	遊びに誘ったり、一緒に遊んだりしながら、一人一人の遊びの楽しみ方や取組に共感したり、支えたりするような言葉掛けや援助をする。 伸び伸びと遊ぶ開放感や心地よさを共有する。 友達に関心もてるような言葉を掛ける。	幼児の誘いに応じて一緒に遊んだり、新しい遊びに誘ったりする。 幼児が繰り返して楽しんだり、挑戦したりしている姿をほめたり、援助したりする。 できるようになった喜びを共有したり、自信や意欲をもたせたりする。	自分たちで遊びを進めている実感がもてるよう、教師も仲間の一員として遊びに加わる。 自分たちで考えを出し合ったり、ルールを決めたりし、遊びを進めようとする姿を大切に、教師の言葉を控えたり、見守ったりする。

研究の結果と考察

1 新しい友達や教師と一緒に遊ぶことで安定しようとしている時期に、安心して遊べるように園庭の隅の木陰に、幼児にとって親しみやすい長縄跳びの台を出し、一人一人の楽しみ方や取組に対応したり、共感したりしたことは、安心感や開放感を味わいながら体を動かす心地よさを感じるようになることに有効だったか

進級し、新しいクラスや友達にまだ慣れず、教師と一緒に遊びたいと思っているA児やD児たち5～6人の幼児は、園庭の木陰に置いてある長縄の台を見つけた。A児がいいものを発見したというような弾んだ声で「先生、長縄跳びやろう。」と言った。B児やC児もやりたいたいと言ってみんなで長縄の台のところに駆けて行った。D児は「私できない、やったことない。」と言

って教師のそばに残った。D児にも縄跳びを楽しんでほしいと考え、嫌ならいいんだよという思いを込めて、「みんなが跳ぶのをちょっとだけ並んで見てみる？」と言うと、D児は「うん。」と言ってついてきた。年中の時に経験のある幼児たちは、しばらくぶりの長縄跳びを楽しみ始めた。A児は目を輝かせながら、楽しそうな表情で跳び始めた。そして跳び終わるともう一度列の後ろに並んだ。B児もリズムに乗って跳べることを楽しんでいるようだった。D児は一番後ろに並びながら、他の幼児が跳ぶ姿を見ていた。しばらくしてD児の番が来た。D児の顔は真剣そうにも不安そうにも見えた。「Dちゃんもちょっとだけ一緒にやってみようか。」「縄がくるっと回ってDちゃんの所へ来たらぼんって跳ぶんだよ。」と声を掛けた。D児が跳びやすいように「くるりんぼん。」と縄の動きと跳ぶタイミングを声に出して言ってみた。するとD児は縄の動きに全身で反応するように一生懸命跳び始めた。「すごい！Dちゃん跳べたよ。」と言うと、「またやる！」と言ってニコニコとうれしそうにまた並んで順番を待ち始めた。みんな体が汗ばむくらい何度も縄跳びを楽しんだ。すると「先生、楽しかったね、明日もやろうね。」という言葉が、A児やD児、他の幼児から聞かれた。

資料1 D児が跳ぶ姿



新しい友達や教師と一緒に遊ぶことで安定しようとしている時期に、教師がD児をクラスメートと一緒に4月の園庭に誘ったこと、友達が自分なりに縄跳びを楽しむ姿をD児が見たこと、教師がD児の不安な気持ちを軽くし、D児が跳ぶタイミングや楽しさが味わえるような縄のまわし方を工夫したこと、楽しかった思いを共感したことなどがD児の心を動かし、開放感を味わい、安心して縄跳びをしたり体を動かす心地よさを楽しんだりする姿につながったと考える。その後、D児は跳んでいる姿を母親に見せたり、「お母さんが長縄を買ってくれたんだよ。」「おうちでもやってるんだ。」と話したり、うれしい思いを手紙にして、教師にくれたりしたことから、D児が長縄跳びを楽しんでいることを受け止めることができた(資料1)。

他の幼児の姿を見てみると、初めは、教師のそばにいて安定している幼児たちと園庭の隅で始めた長縄跳びだったが、毎日続ける中で次第に長縄跳びに加わってくる幼児が増えてきた。クラスの幼児だけでなく、小さい組の幼児や長縄跳びに興味を示さなかった幼児たちも加わり、A児やD児たちと一緒に遊ぶ姿が見られるようになった。蛇跳びを楽しむ幼児、跳べるようになったことを楽しむ幼児、たくさん跳ぶことを楽しむ幼児、回転しながら跳んだり、友達と一緒に跳んだりすることを楽しむ幼児、たくさんの友達と跳ぶことを楽しむ幼児など、幼児なりに縄跳びを楽しむ姿が1か月以上見られた。

2 気の合う友達や教師を誘い遊びの経験を広げようとしている時期に、教師が進んで鉄棒での遊びを楽しみ、幼児たちと一緒に繰り返し取り組んだり挑戦したりし、幼児の気持ちを支えたり、幼児同士刺激し合えるようなかわり合いをしたりしたことは、体を動かして遊ぶ自信や意欲をもつようになることに有効だったか

七夕祭りの日に、みんなで笹に飾りをつけ、園庭に大きな笹を立てた。E児は「前回りができるようにになりたい。」と短冊に書いた。E児の願いをかなえてあげることが、E児が新しい遊びに挑戦したり、自信や意欲をもったりすることにつながるだろうと考え「なんだか、Eちゃんのお願いは、お星様がすぐかなえてくれそうな気がするなあ。」と言葉を掛けた。E児が「ほんど？」と言ったので教師は「うん、本当だよ。ねえ、鉄棒のところへ行ってみない？」と言うとE児は「行く行く。」と言って教師と一緒に鉄

資料2 E児が鉄棒に挑戦している姿



棒のところへ来た。自分で跳びつくが、回ろうとすると怖いようだ。E児が怖がらずにできるように、ゆっくり回転させ地面に足が着くまでしっかりと支え、前回りの感覚がつかめるようにした(資料2)。E児の勇気と喜びに共感し、教師が「Eちゃん、できたよ。Eちゃんが頑張ったからお星様が願いをかなえてくれたね。」と言うと、E児は「もう一回やる!」と言ってまた鉄棒に跳びついた。E児と一緒に繰り返すうちに「先生、押さえていなくていいよ。」「そばにいていいよ。」「遠くで見てて。」と少しずつ自分一人で回ろうとする意欲や自信が感じられる言葉が聞かれた。そして、とうとう一人でできるようになった。そのことを聞いたF児、G児、H児たちがやりたいと言ってきた。教師が「じゃあ、みんなでやろう。」と言うと、女児たちが「やるやる! Eちゃんやってみて!」と言い、みんなで、鉄棒のところへ駆けて行き、前回りの練習が始まった。E児の回る姿を見て、自分もできるようになりたいという思いが膨らんだようだ。E児から「大丈夫だよ、絶対できるよ。」と友達を励ます言葉が聞かれ、みんなで頑張ることができた。

園生活も安定し、気の合う友達や教師と遊びの経験を広げようとしている時期に、園庭にE児が興味をもっている鉄棒があったこと、願い事を書いたり飾ったりできる七夕の環境があったこと、E児の願いが期待や意欲につながるよう教師がかかわったことなどから、E児は、繰り返し取り組んだり、挑戦したりし、前回りができるようになったと思われる。E児の願いがかなえられたことが刺激になり、他の幼児も友達や教師と一緒に取り組んだり、できたときの喜びや自信を共感し合ったりし、繰り返し楽しむ姿が見られるようになった。その後、E児が逆上がりもできるようになりたいと言って、挑戦する姿が見られるようになったことから、E児の鉄棒を楽しむ気持ちがうかがえる。

クラスの幼児の姿を見てみると、E児、F児、G児、H児たちの鉄棒での遊びを通して、鉄棒に集まってくる幼児が増えてきた。友達が鉄棒を楽しむ姿や練習する姿を見て、自分もやってみたくて、「豚の丸焼き」や、鉄棒に椅子のように腰掛けたり、逆上がりに挑戦したりなど、互いに教え合ったり、刺激し合ったりする姿が見られるようになった。2学期になっても「先生、一緒にやろう。」と幼児から声を掛け、鉄棒で遊ぶ姿が見られた。

3 グループの友達やたくさんの友達と一緒に遊ぶことを楽しもうとしている時期に、遊戯室の広い空間に、巧技台、マット、ウレタン積み木などみんなで力を出し合って遊べる遊具を用意し、教師も仲間の一員として遊びに加わったり、見守ったり、自分たちで遊びを進めていく楽しさが味わえるようなかわりをしたりしたことは、体を動かして遊びを進めていく充実感を味わうようになることに有効だったか

10/21の雨の朝、I児が昨晚父親の背中で跳び箱をやったという話から、他の幼児たちが巧技台での遊びを思いつき、みんなで遊戯室に行った。巧技台やウレタン積み木を見つけると組み立てながらイメージを膨らませたり、友達と一緒に大きな巧技台を担いだりしながらみんなで遊び始めた。J児、K児たちが「この箱、どこに置く?」「ここがいいんじゃない?」「オレ、こっち持ってるから。」「オーケー。」などと、自分たちで考えを出し合ったり、受け入れ合ったりして組み立てていった。また、L児、M児が「これ使いたい。」「じゃあ、一緒に持っていこう。」「みんな、持ってきたよ。」「サンキュー。」など、大きくて重たい巧技台も力を合わせて運んだり組み立てたりすることを楽しんでた。出来上がってくると「どこからスタートする?」「ここだよ。」などの言葉が聞かれ、自分たちで組み立てた四角の大きなアスレチックのような遊び場で遊び始めた。他の場所では、箱型の巧技台を自分たちがやっと入れる位の高さに積み上げ、

資料3 たくさんの友達とワーブごっこを楽しむ姿



中に入ったり出たりして楽しんでた。そのうちに、箱型の巧技台は、幼児を好きな所に連れて行ってくれるワープの道具になった。すると、お客さんが増え、入れ代わり立ち代わりみんなが入りたがり、列ができた。「ここに入るとワープできます!」「どこまで行きますか?」「わんぱく公園に行ってください。」「1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、はい、着きました。ここが、わんぱく公園です。」など、イメージを共有して遊ぶことを楽しみながら、J児たちが作った四角のアスレチックを指差した。すると、N児が「わあい、着いたぞ!ありがとう。」と言って遊び始め、別々に始まった遊びが自然な会話の中で結ばれ、たくさんの友達とイメージを共有し合い、遊びを楽しむ姿が見られるようになった(資料3)。

グループの友達やみんなと一緒に遊ぶことを楽しもうとしている時期に、巧技台、ウレタン積み木、マットなどの遊具と、たくさんの幼児たちが一緒に遊べる遊戯室という広い場を用意したことで、幼児たちは自分の力を発揮したり、友達と力を合わせたりして、重い遊具を運んだり、組み立てたりし、そのなかで思い切り体を動かして遊ぶことができたのだと思われる。また、教師も仲間として一緒に遊んだり、幼児同士で考えを出し合い遊びを進めている姿や、イメージを共有して遊んでいる姿を大切に、言葉掛けを控えたり、見守ったりしてきたことで、幼児たちは自分たちで遊びを進めていく充実感を味わえたのではないと思われる。

他の幼児の姿を見てみると、みんなと一緒に遊ぶことを楽しむより、気の合う友達同士で遊ぶことを楽しんでいるO児、P児、Q児、R児なども遊びの中に入って、ワープごっこを楽しむ姿が見られた。次の日には、P児、Q児は朝早く登園し、「遊戯室、開いている?」と聞いて昨日のワープごっこの続きを、今度は自分たちで始めようとする姿が見られた。その後、幼児たちは、グループの友達とだけでなく、たくさんの友達と一緒に思い切り体を動かして鬼遊びをしたり、ドッジボールなどの遊びを楽しんだりするようになってきた。

VII 研究のまとめと今後の課題

安定しようとしている時期には、友達がしている遊びを見て仲間に入ったり、教師との一対一のかかわりの中で安心して自分なりの遊び方を楽しんだり、開放感や体を動かして遊ぶ心地よさなどを味わったり、繰り返し楽しんだりする姿が見られるようになった。

経験を広げようとしている時期には、いろいろな遊びに目を向けて取り組もうとしたり、してみたい遊びやできるようになりたい遊びを友達や教師と一緒に繰り返し楽しんだり挑戦したり、できるようになった喜びを共感し合ったり、自信や次への意欲をもったりするなどの姿が見られるようになった。

遊びを楽しもうとしている時期には、グループの友達やたくさんの友達と一緒に思いを伝え合い、力を合わせて自分たちで遊びの場を作ったり、イメージを共有しながら思い切り体を動かして遊んだりし、たくさんの友達と一緒に遊びを進めていく充実感を味わう姿が見られるようになった。以上のことから、友達や教師のかかわりの変化に視点を当てた環境の構成の工夫は、体を動かして遊ぶことを楽しむ幼児の育成に有効であったと考える。

教育課程を踏まえたうえで、本学級の幼児の友達や教師とのかかわりの姿を時期として押さえ実践してきた。実践を進めていくなかで、教師の設定した環境の構成に興味をもたない幼児の姿も見られた。しかし、幼児の育ちの姿の個人差は大きいことを踏まえ、長い目で期待をもちながらかかわっていくことで、幼児が少しずつ変容していくことを実感することができた。

友達や教師とのかかわりの変化に視点を当てた環境の構成というのは、保育の様々な場面で応用ができるのではないかと考える。どのような場面でどのように応用できるのかを今後の課題とし、探っていきたい。